

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2008年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		研究科 異文化コミュニケーション	専攻 異文化コミュニケーション
指導教員	所属・職名		氏名	
	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科		鳥飼 玖美子 印	
自然・人文の別	自然	・ <u>人文</u>	個人・共同の別	<u>個人</u> ・ 共同 1 名
研究課題名	ローカリゼーション翻訳における、翻訳メモリを使用した翻訳作業への有効性の研究			
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	立教大学 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程 3年		山田 優 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
研究期間	2008 年度			
研究経費	200 千円			

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、翻訳理論研究を基底として、実務翻訳、特にソフトウェア等のローカリゼーションにおける翻訳行為と訳出物の研究を行う。特に、翻訳メモリといわれる翻訳支援ツールが及ぼす、翻訳（者）への影響を調査する。

翻訳メモリは、パラレルテキスト的なコーパスデータを基盤とした仕組みであるが、このような言語資料から翻訳者はどのような情報を得ているのか（いないのか）、またデータベース内の既存訳が新規の翻訳にどのような影響を及ぼすのかを、テキスト的分析、効率性・時間、翻訳者の訳出プロセスの観点から検証する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[翻訳学] [ローカリゼーション] [翻訳メモリ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、翻訳学の中でも比較的新しい分野とされる「ローカリゼーション」において利用される「翻訳支援ツール(翻訳メモリ)」が、訳出物と翻訳者の訳出過程に与える影響を調査する。しかし、まずその前に「ローカリゼーション」の概念を翻訳学の視座から定義しておく。Pym(近刊)らを筆頭に、それを一つの独立した研究パラダイムとして認識する動きがある。ローカリゼーションの特徴としては、従来の「起点」「目標」言語の概念が消失しつつあること。それは、ドイツ機能主義の研究者Vermeer(1989/2000)が目標言語重視の視点から「起点言語の威厳は失われた」と発言したこととは異なり、ローカリゼーションにおける起点言語は、その作業工程が多言語に展開される為のピボット言語もしくは「中間言語interlingua」となり、文化的要素を排除し高度に制御されたコントロール言語になったことを意味している。また、目標言語の概念は「ロケール」に置き換わり、国家やそれに密接する文化とその言語との関係が、従来の捉え方と異なることが示唆された。ローカリゼーションにおける翻訳とは「翻訳+ α 」であり、製品等に付随した言語的活動に捉えられ、翻訳はローカリゼーションに包含される。また、中間言語→多言語へと作業されるその様は、「国際化(Internationalization)」という新たな言説を作り、実際のローカリゼーションは、この国際化のプロセスと共に考察されなければならない。そして、最も重要なのは、当該概念が、翻訳研究分野から発展したのではなく、ソフトウェア・プログラマ等の技術分野を発端とし、そこに「再利用」を基底とする考え方が存在しているという点だ。後述する翻訳メモリ等もこの「再利用」を応用した技術ツールであると言えるだろう。翻訳メモリの研究は以上のようなコンテキストにおいて利用されることが通常であり、本研究では、そのツールの使用がどのように翻訳(者)に影響しているのかを検証する。

まず、訳出物の分析方法としては、トゥーリ(Toury, 1995)らによって確立された記述的翻訳研究のうち「干渉の法則」および「標準化進行の法則」の概念を援用し、これに「翻訳メモリ」内に保存された既存翻訳という新たな存在を追加することにより、従来のコーパス研究が対象としてきた普遍的特性S(訳出物と起点テキストに見られる語彙や統語構造の相違や特徴の記述)および普遍的特性T(訳出物と同一目標言語内の翻訳でなくオリジナルで直接書かれた文章(パラレルテキスト)との相違)に対して(Chesterman, 2004)、新たに訳出物と翻訳メモリ内の既存翻訳との比較から、テキスト内の要素に「干渉」と「標準化」がどのように見られるかの分析を行う(山田, 2009)。つまり、翻訳というものが、起点言語と目標言語の翻訳でないテキストとの中間に「干渉」と「標準化」の2つのパラメータのみの影響を受けた結果として計られるものではなく、既存訳からの影響を考慮することが適切な記述の鍵となる。しかし、静的なテキスト同士の比較だけでは、実際にどのように影響を受け合ったのか、そのすべてを把握することはできない。そこで、翻訳プロセスも同時に、本研究では考察する。

翻訳プロセスの先行研究は、ハンセン(Hansen, 2002)による翻訳の事前準備にかかる時間と翻訳品質の関係(時間をかけすぎても品質は向上しない)、Livbjerg and Mess(1999)の翻訳支援ツールが必ずしも品質向上には繋がらないという研究、また、Laukkane(1993)が行った、職業翻訳者のルーチン作業が創造的な翻訳の支障となる等といった研究がある。これらは、翻訳プロセスのうち、翻訳行為的(Translational action)の側面を考察した研究と換言できるが、これに対して訳出中(translationalもしくはtransfer)、すなわち訳文を書き出す段階の詳細分析については、Tirkkone-Conditt(2004)の「モニタリング仮説」によって、翻訳者は、まず直訳的

研究成果の概要 つづき

(lieteral)に訳出を行い、その後(または、その途中で)、自らの訳文を見直す・書き直す工程を経ていることが考察されている。「直訳的な訳出」という概念を翻訳単位(unit of translation)の視点から考えると、一般的に、熟練の翻訳者の方が新米の翻訳者よりも翻訳単位を長く取る、つまり新米翻訳者は比較的単語レベルで訳出を行うのに対して、熟練翻訳者は節や文章単位で作業を行うと言われてきたが、この点をTranslog (Jacobsen, 1999)というツールを用い、訳文の記述の際のポーズ(空白時間)を認知的付加と捉え実証研究を行ったDragsted(2004)によりほぼその仮説通りであることが実証された。翻訳メモリや機械翻訳との影響の視座を入れた近年の研究では、Eye-tracking(瞳孔の動きを測定する技術)を用いて、翻訳メモリ使用時のFuzzy Matchセグメント等の訳出プロセスにおける作業付加を認知付加の観点からから研究を行ったO'Brien(2006)の論文では、80-90%マッチと機械翻訳結果との文章を作業する翻訳者の認知付加がほぼ同等であることが明らかにされた。続くArenas(2008)の研究では、機械翻訳の結果と翻訳メモリ内の既存訳を修正する状況において、作業効率(時間)と品質の関係の調査がなされ、機械翻訳の訳文結果を修正したほうが品質面においても優位であることが反証された。つまり、これらの結果から言えることは、翻訳という行為自体が、起点テキストを翻訳するとい行為ではなく、むしろ既存訳を「編集する」というトレンドに変容し、かつ作業効率と品質においても許容レベルに近づいているということである。冒頭で述べた「再利用」の概念が定着しつつあると言う事である。これは、翻訳メモリを使用した作業にも当てはまることである。本研究では、時間や効率面以外に、詳細な訳出物の分析に加え、翻訳作業中の訳出プロセスを観察することで、何がどのように影響を与え、最終的な訳文に辿り着くのかを考察する。

以上を基に、本研究では、2009年3月にパイロット実験を実施した。翻訳を学ぶ学生9名に(モンレー国際大学)、翻訳メモリを使わない作業とメモリ使用した作業を行ってもらい、その全作業工程をコンピュータ上の画面録画した。グループを2つに分け、1つのグループのメモリには「直訳的」な訳文の仕込み、他方には「意識」(実際の用いられた訳文)を使用した。テキストはローカリゼーション分野で通常使われるコンピュータ関連のマニュアルを選んだ。以下の点に焦点を合わせて観察を行う。

1) 訳出物の観点から、メモリの使用および不使用の比較で、訳出物がどう変わるか

メモリ不使用の訳文のバリエーション(選択語彙、レジスタ、スタイル、語彙密度、TTR等)が、メモリ使用時に対して、どのように変化するか

2) 新米翻訳者が作業する翻訳単位が「語彙ベース」であるという前提が成り立つのであれば、「直訳的」なメモリを使用したグループの作業効率や訳文品質(メモリからの影響)は、「意識」のメモリを用いたグループよりも向上するのか。

3) メモリの使用により、「調査(documenting)」に費やす時間や作業方法に変化が見られるか。

検証方法は、定性的に行うよりはむしろ質的に個人差を考慮する。結果に一点のパターンが見られるようであれば、変数をさらに制御して追試を行う等を検討する。